

夜、騒音どもはいくらか寝静まって風は無音

ガラスを突き抜ける力を持つ者だけが私にコンタクトをとってきて
ざわざわさせる

地面から三十センチばかり浮いた箱に座っているような気分で

私は朗読をしていた

電子のつぶを媒介にしみわたってゆく自分の声

ああ、しみわたる、あの声や。

もはやそれは私の声ではなく

三百年前に生きた人の声だった

(懐かしく勇気づけられるこの感じ)

古人も多く旅に死せる

時の流れの旅路で力つきた者たちは墓を持たない

その累々たる死体の上には埃が積もり

あたかもなにもなきがごとし

私たちは平気で踏んづけてゆくのだ

彼らの旅を忘れて